

強制も任意もあった

婦安慰軍従

太平洋戦争の従軍記者・戦史研究家

R・シエロッド氏に聞く



「ワシントン十三日」古森義久「日本
政府が第二次大戦中の従軍慰安婦問題で
謝罪を表明したことについて、太平洋戦
線での米軍の従軍記者として活躍した戦史
研究家のロバート・シエロッド氏は十二
日、産経新聞のインタビューに応じ、日
本側の謝罪を基本的には肯定しながら
も、過去の戦争の異常な側面を長年たっ
てから個別に認定していくと、果てしな
い混乱が起き得るとの見解を明らかにし
た。またインドネシアを占領した日本軍
に関して、強制と任意の両方の実情があ
ったことを終戦直後に現地で聞いたと述
べる一方、「人間の記憶に頼る、強制の
認定はきわめて難しい」と語った。

認定、極めて困難

謝罪は果てしない混乱に

シエロッド氏は太平洋戦争中、タイム・ライフ誌の記者として米軍に従軍し、サイパン、タラワ、沖縄などの激戦を報道した。戦後は同誌日本特派員となった。あとサタデー・イブニング・ポスト社の副社長を務めた。現在八十三歳だが、なお戦史を中心に執筆活動を続けている。

同氏は今回の日本政府の謝罪声明について、「私は自分の体験から日本軍の非人道的行為が現在の日本国民が考えているよりずっとひどかったことを知っている。またその種の行為の非を認めて謝罪すること自体は肯定する」という立場を表明した。

しかしシエロッド氏は「日本政府がもし、この慰安婦問題を端緒にして過去についていかなる再吟味にも応じるといふ門戸開放策をとったら、その結果、どうなるか」と語った。

同氏は「異常な個別ケース」に関連して、戦争中に「自分の目前で起きた事件」として、ガダルカナル島で米軍兵士が日本人の捕虜を「ジャップ」を殺してやると射殺したケースや、サイパン島で海兵隊員数人が抵抗のない裸の日本兵を、日本刀を持っていたという理由だけで射殺したケースなどを挙げ、個別の案件を拡大して摘出することの問題点を示唆した。

日本軍の慰安婦についてシエロッド氏は、「終戦直後にインドネシアに行き、日本軍占領時代の話として、強制と任意の両方の実情があったことを聞いた。だから強制実情が存在したことは間違いないだろうが、ただ戦争という異常な状況下での、強制の認定はきわめて難しいと思う。まして何十年もたってからも、人間の記憶のみに頼っての認定作業は非常に困難だ」と語った。

元慰安婦補償 マレーシアでも要求へ

【クアラルンプール13日】「竹信三恵子」東南アジアで、旧日本軍の従軍慰安婦の認知と補償要求問題の解決に期待が高まっている。宮沢内閣の調査結果発表と謝罪に続き、細川首相が第二次世界大戦を「侵略戦争」との認識を示したためだ。

これまで日本政府の慰安婦調査で、慰安婦の存在が認知されていなかったマレーシアで十三日、与党第一党の統一マレー国民組織（UMNO）青年部国際局の事務局長で慰安婦問題の調査責任者ムスタファ・ヤコブ氏は、朝日新聞記者に対し、日本の新政権の積極姿勢を歓迎すると表明。

UMNO青年部と与党第二

政府調査資料

16日から公開

日本政府が調査し四日に発表した「慰安婦」関係の資料のうち、ミャンマーの朝鮮人慰安婦を尋問した連合軍の報告書など米国立公文書館の資料が、十六日から内閣外政審議室で公開される。政府が今回発表したのは、米国立公文書館のほか日本の国立公文書館、国会図書館、防衛庁、外務省などの資料百九点。

国会の決議に

慰安婦明記を

新政府による戦争謝罪の国会決議について、和田春樹東大教授ら十人の学者グループが十三日「犠牲者の象徴として従軍慰安婦の明記」などを求めた細川首相あての要望書を提出した。

元慰安婦100人

名乗り出る

「ジャカルタ13日」インドネシアの民間人権団体、法律援助協会は十三日、第二次大戦中、旧日本軍に慰安婦として働かされていた百六人の女性が同協会に名乗り出たと発表した。内訳は首都ジャカルタの四十五人、ジャバ